

モロハタマキビ *Lacuna carinifera* A. Adams

【選定理由】

三河湾の個体群について、生息記録と共に形態特徴と生活史についての報告がある(早瀬・他, 2013, 2016; 早瀬・吉川, 2016)。三河湾奥部(蒲郡市沖)から湾口部(南知多町沖)の干潟から潮下帯のアマモの葉上など海産植物に付着して生息する。ほぼ1年生の種であり、冬から早春に大型個体が見られる。県下のアマモ場の面積は明らかに減少しているため、本種の生息基盤も脆弱である。また、アマモ場以外に初期生活史において海藻藻場の存在も重要な種であるため、この両者を具えた環境が減少していることも本種の生涯を通して生息できる環境が失われていることに直結している。個体群の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられ、本種は将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。

【形態】

冬季の成熟個体は、殻長10mm前後の大形個体となる。殻は円錐形で、幼層の縫合は深くくびれる。緑褐色で、成貝の殻の周縁には成長線に沿った茶褐色の縞模様が見られる。殻表はほぼ平滑で弱い成長脈がある程度。胎殻はきわめて小さく、幼層も小さいので、殻頂部はやや尖る。周縁は強く角張り、キールとなる。臍孔は狭く周囲には強い角を生じる。蓋は薄く淡黄色、革質で少旋型である。軟体は頭触角を除く頭部と足の先端部が黒色に彩色される。雄は基部が黒色に彩色された鎌状に曲がる細長い陰茎を有する。歯舌は、中歯、側歯、内縁歯、外縁歯より構成され、形状は発達段階で変化が生じて一定しない特徴を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内の分布域は比較的広く、三河湾の沿岸域のほぼ全域や伊勢湾の一部地域(常滑市)に分布するが、確認される殆どが小形の幼貝であり、成貝が確認される場所はきわめて少なく、良好なアマモ場が残されている海域に限定される。

【世界および国内の分布】

日本を分布の中心とするが、朝鮮半島にも分布する。日本では北海道南部以南、瀬戸内海、九州北部までの内湾域のアマモ場環境に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述のとおり生息環境は良く保全されたアマモ場に限られる。ほぼ1年生の種と考えられ、冬から早春に大型個体を確認される。本種は冬から春にかけて長径3mm程度の楕円ドーム状の卵囊(1卵囊に3300卵ほどが確認される)をアマモ葉上に産み付ける。浮遊幼生(ベリジャー幼生)期間を持つ。新規加入は春であり、稚貝は狭い範囲内の大形海藻に数百~数千個体付着する例も確認されている。10月頃まで殻サイズにおいては殆ど成長することなく、小形のまま様々な海産植物上で確認される。その際の植物間の移動には長く伸ばした粘液糸を潮流に乗せて長距離移動すると考えられている。秋から冬にかけて急激に成長し、アマモ葉上のみで確認される様になり、交尾、産卵を行う。春以降は成貝が確認されず、死滅するものと考えられる(早瀬・他, 2013, 2016; 早瀬・吉川, 2016)。本種は、このような生活史であるために、個体数の月毎の変動も大きく、生息状況のモニタリングには毎年の観測月を同一にするなどの注意を要する。

【現在の生息状況／減少の要因】

西尾市東幡豆町のアマモ場などでは現在も個体群が維持されているが、全ての生活史を通して本種を確認することができる環境は、県内では場所が限られている。本種の最も大きな減少要因は、アマモ場の消失である。ただし、アマモ場さえあれば本種が生息できるわけではなく、隣接する健全な海藻藻場の存在も重要であり、水質悪化など他の要因も考慮する必要がある。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としてのアマモ場を含めた、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【特記事項】

小形のセトウチヘソカドタマキビ *L. setonaikaiensis* とされた個体群は、瀬戸内海個体群に過ぎず、本種の異名である(福田, 2012)。

小卵多産型で浮遊幼生期を持つため、新規加入時期には、きわめて多数の稚貝が確認されるが、成熟個体は著しく減耗する。したがって、幼貝の確認個体数のみにより、本種個体群の健全性を判断することは困難であるので、注意すべきである。

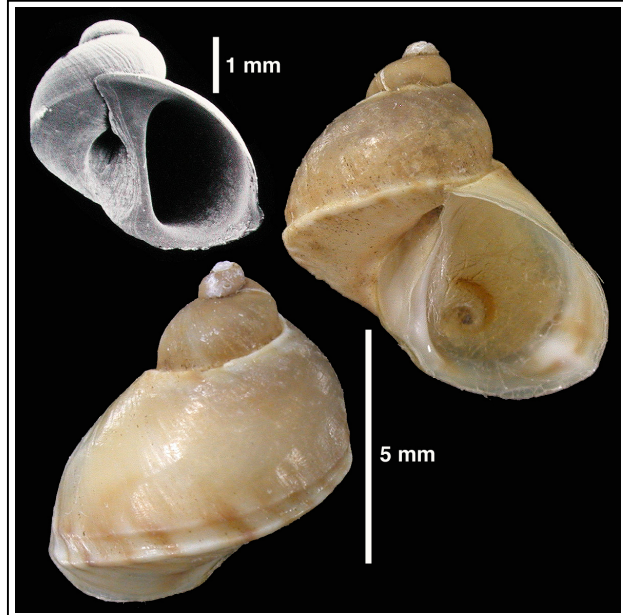
【引用文献】

- 福田 宏, 2012. モロハタマキビ(セトウチヘソカドタマキビ), p.34. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・中島 匠・種倉俊之・吉川 尚・松永育之, 2016. 三河湾に生息するモロハタマキビの形態的特徴と初期生活史, ちりぼたん, 45(4): 214-226.
- 早瀬善正・種倉俊之・松永育之・長谷川貴大・山崎喬之・野場俊樹・神谷武之・吉川 尚, 2013. 三河湾に生息するモロハタマキビの形態的特徴と生活史(学会発表講演要旨), Venus, 71(1-2): 150.
- 早瀬善正・吉川 尚, 2016. 藻場の葉上巻貝類, pp.154-163. in: 石川智士・吉川 尚(編), 幡豆の海と人びと, 口絵14+xvii+362pp.+v. 総合地球環境学研究所, 京都.

【関連文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報), かきつばた, (26): 18-20.
- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(早瀬善正・木村昭一)



左上: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深2-4 m), 1995年3月20日, 木村昭一採集, 右上, 左下: 西尾市前島, 2012年1月18日, 早瀬善正採集